



TITLE:

# 國際價值論について

AUTHOR(S):

松井, 清

---

CITATION:

松井, 清. 國際價值論について. 經濟論叢 1947, 61(3): 127-147

ISSUE DATE:

1947-09

URL:

<https://doi.org/10.14989/132142>

RIGHT:

# 經濟論叢

第六十一卷 第三號

---

國際價值論について……………松 井 清

貨幣の流通速度の概念に就て……………岩 根 達 雄

片山潜と明治労働運動史……………岸 本 英 太 郎

高橋幸八郎氏「近代社會成立史論」……………河 野 健 二

---

京都帝國大學經濟學會

## 國際價值論について

松 井 清

勞働價值説の立場から國際間の價值問題を取扱つたものとしては、朴克采氏「リカルドオの比較生産費説について」(經濟論叢三十八卷五號昭和九年)や名和統一氏「國際貿易に於ける價值問題」(大阪商科大学研究年報第八號)等がある。この二つの論文は何れもリカルドの理論にならつて、いはゆる單純商品生産社會を假定し、その假定の上に問題を展開することを主なる仕事としており、その法則の資本家的商品生産社會への擴充を豫想しつつも、充分これに言及せず、その點に關してまだ多少の問題を残してゐるやうに思はれる。わたくしはこの小文で同じ點から出發しながらその残されたと思はれる問題にまで筆を進めたく思ふ。この問題は現實の問題に連つてゐる。最近民間貿易の再開といふ事實に當面して、資本主義と外國貿易の問題が色々の視角からとり上げられてゐるがそれらの議論に共通する考へ方は、資本主義が外國貿易を必要とする仕方は、論理的なものではなくして歴史的なものであるとの見解である。わたくしもその點に關しては異論がない。しかしその場合價值論の立場から問題が如何に取扱はれねばならぬかについて、はつきりした考へをもたねばならぬであらう。資本主義を貫く價值法則が外國貿易といふ歴史的モメントを考慮に入れた際如何に修正せられるか、それこそ國際價值論の問題でなければならぬ。

資本主義の基礎を貫く價值法則は、世界が一つの平坦な社會であることを前提し、その積分的部分をなす個々の國家の存在は一應捨象して考へられてゐる。ところがいまこの個々の國家の存在を考慮に入れた現實の世界に於いては、資本主義の運動法則は、それだけ修正をうけなければならぬ。マルクスはこれを價值法則のモディフィケーションと呼んでゐるが、この問題こそいふ國際價值論の問題である。

國際價值論を取扱ふに當つては、われわれはデヴィッド・リカードまで立歸らなくてはならないであらう。尤もリカード自身は國際價值といふ言葉を用ひてゐるわけではなく、また後の自由貿易論者がかれの理論に附してある比較生産費説といふ言葉を用ひてゐるでもない。かの有名な「經濟學及課税の原理」第七章「外國貿易論」に於て「一國內に於て諸貨物の相對價值を支配する同じ規則は、二國若しくは其以上の國の間に交換せらるる諸貨物の相對價值を支配するものではない」として外國貿易に作用する特殊法則を展開してゐるのであるが、これこそいま問題とする國際價值論の出發點をなす。リカードの國際價值論は自由貿易論を基礎づけるものとして、「比較生産費説」なる名稱の下に、その後の資本主義的經濟學により繼承されていつた。その理論史については、「貿易理論の研究」(昭和十六年九月)で觸れてゐるからこゝでは割愛しなければならぬ。その理論史の最後にわたくしの結論として書いた少少の考へを、更らに展開したのが本論である。だから前掲書と多少重複する點のあることはこゝでおことわりしておく。リカードは屢々引用され、わたくしも幾度か引合に出した次のやうな例を以てかれの考へを説明してゐる。

葡萄酒一單位を生産するに必要な労働時間  
 ランチャー一單位を生産するに必要な労働時間

ポルトガル	80	90
英國	120	100

この數字はポルトガルが英國に對し何れの生産部門に於ても生産力の絶對的優越をもつといふこと、しかし葡萄酒生産に於て更に相對的優越をもつことを意味してゐる。反面の事實として、英國はポルトガルに比較しすべての部門に於て生産力が劣つてゐるが、ランチャー生産に於て相對的に優れてゐることを意味してゐる。かゝる事實が成立するためには、第一に一國の内部に於ては勞資の移轉が自由に行はれ生産條件の均等化が存在するに對し、國際間では勞資の自由な移動が行はれず、生産條件の均等化が存在しないこと、従つて國際間の生産力の差異はかなり持續的であること、第二にこの生産力の國際的差異は、生産部門の異なるにつれてその程度を異にすること、これを總括するなら、生産力の國際的差異は單に絶對的にのみならず相對的にも存在するといふ條件が必要である。この場合、リカードは兩國の間に商品交換が行はれ、而もこの外國貿易によつて兩國とも利益するといふのである。ところでいまその生産に八〇労働時間を要するポルトガルの葡萄酒が一二〇時間を要する英國に輸出されるといふことは理解されるが、その生産に一〇〇労働時間を要する英國のランチャーが九〇時間しか必要としないポルトガルに輸出されるのは一見甚だ奇異に感ぜられるのである。その理由としてリカードの擧げてゐるところは、ポルトガルにとつては、生産力の相對的に優れた葡萄酒の生産にすべての労働資本を集中し、その一部分をさして英國に輸出し、それと交換にランチャーを輸入した方が有利であり、英國にとつても、生産力の相對的に優れたランチャーの生産にすべての労働資本を集中し、その一部分をさしてポルトガルに輸出し、それと交換に葡

葡萄酒を輸入した方がより有利であるといふにある。この主張はその後の解説者によつて次のやうに説明されてゐる。

ポルトガルに於ける二商品の  
の相對價值(交換比率)  $1 : \frac{8}{9}$  又は  $1 : \frac{40}{45}$

英國に於ける二商品の相對  
價值(交換比率)  $1 : \frac{12}{10}$  又は  $1 : \frac{54}{45}$

貿易の開かれた結果兩國間に於ける二商品の相對價值(交換比率)が二國交換比率の中間例へば一對一に決定したとしよう。さうするとポルトガルは一單位の葡萄酒と引換へに、從來ならラシヤ 40 45 單位しか得られなかつたのに、いまや 45 45 單位を獲得することが出来る。同様にして英國は一單位の葡萄酒を獲得するのに、從來はラシヤ 54 45 單位を要したのに、いまや 45 45 單位を以て足りる。かくて國際貿易の開かれた結果、從來と同じ費用を以て社會生産物を増加するか、或ひは同じことであるが、從來よりも少い費用を以て從來と同じだけの社會生産物を獲得しうるといふことになる。

さてこの際誰しもが氣づくことは、兩國間に國際貿易が開かれ、ポルトガルが葡萄酒の生産に、英國がラシヤの生産に特殊化するためには、ポルトガルの勞働の一單位が國際的にはより高い價格に、英國の勞働の一單位が國際的にはより低い價格に評價せられねばならぬといふことである。兩國の勞働時間の大きさがそのまゝ價格を表現するとせば、一〇〇の價格のものが九〇の價格の支配する國へ輸出せられるといふことは考へられない。いふまでもなく資本主義社會に於ける分業は商品の價格を通じて行はれるのであり、特定の生産に特殊化することの有利、不利は商品の價格を通じて以外これを知ることとは出来ないものである。而も一國內に於ては勞働時間こそ

のまゝ價值を表し、價值と價格と一致するとみて差支ないのであるが、いま當面の問題である世界市場では、必ずしもさうでない。これマルクスが價值法則のモディフィケーションと呼んだものである。マルクスが巧みにも指摘したやうに、リカードの國際價值に關する命題は、國際間に於ける不等價交換を前提しなければ成立しえないのである。かゝる重要なポイントを意識的にか無意識的にか見落した點にリカード國際價值論の産業資本家的な限界が見出される。折角國際間に於ける生産力發展の不均等なる事實から出發しながら、その前提が何時の間にやら消えうせ、貿易によつて當事國が共に利益しながら而も富國が貧國を搾取するといふ事實は、リカードによつて看過され、かれの調和的自由貿易論の思想となつたのであるが、これはその後の資本主義的經濟學によつて繼承せられるところとなつた。この點をリカード國際價值論批判の第一の指標として銘記しよう。

ところでリカードも現實に國際貿易が行はれるためには、相對價值の差異が絕對價格の差異に轉化するのが必要なことを全く無視したわけではない。たゞかれは勞働時間→價值→價格といふ論理を追はず、相對價值→金價格→價格といふ論理の運び方によつて、相對價值を絕對價格に轉化したのである。即ち相對價值の差異が絕對價格の差異に轉じて、英國からポルトガルに向つてラシヤが輸出されるのは、それがポルトガルに於て英國に於けるよりより多くの金に對して交換されるからであるとしてゐる。そしてその原因は、かれ自身明言してゐないが貨幣の相對價值が國際的に異なるがためである。では貨幣の相對價值はなぜ國際的に異なるのであるかといへば結局それは商品の場合と同じやうに、生産力の國際的差異にまで立歸らねばならぬ筈であるに拘らず、リカードはこれを商品の價值法則とは別個に貨幣數量説を以て説明しやうとしたのである。このことは結局商品交換と物々交換とを機械的に同一視するリカード國際價值論の第二の誤謬に導いてゐる。「金及び銀が流通の一般的媒

介物に選ばれてゐるので之等金屬は、商業上の競争によつて、かゝる金屬が存在せずして、諸國間の貿易が純然たる物々交換であつた場合行はれる筈の自然的交易に適應するやうな割合に於て世界各國の間に分配せられるものである。」ところが單なる使用價值と使用價值の交換である  $W \rightarrow W$  (物々交換) と、販賣と購買とが分離する  $W \rightarrow G \rightarrow W$  (商品交換) とは根本的に異つたものである。販賣と購買の對立と矛盾は生産と消費との對立と矛盾をいみし、われわれはそこに既に恐慌の可能性を見出すのである。リカードが國際貿易を物々交換と同一視し貿易が一國內生産力の發展の不均衡を一時的に是正するものでありながら、結局更らに大きな規模に於て擴大再生産するものであるといふ事實を看過した點に、われわれは調和的自由貿易論者の論理的限界をみる。これを批評のための第二の指摘とする。

以上リカードは單純商品生産社會を假定し商品交換と物々交換を同一視することによつて、外國貿易は價值量に關係なしとの結論に導いてゐる。「外國貿易の擴張は、貨物量從つて享樂額の増加には貢獻するところ甚強大なるべしと雖も、而もそれは、決して直ちに一國內に於ける價值額を増加せしむるものではない。一切外國品の價值は之と交換せらるる我々國の土地及び勞働の生産物の數量に依て測定せられるのであるから、假りに新市場の發見によつて、我國貨物の一定量と交換に外國品の二倍の數量を取得しても、吾々はより大なる價值は得て居らぬ筈である。」見らるる如くリカードは外國貿易は價值額に影響なしとしてゐる。そしてこの考は資本家的商品生産社會にもそのまゝ妥當せしめられてゐるのである。「されば外國貿易は、收入の其に費さるべき物の數量と種類とを増加せしめ、貨物の豊富と低廉とによつて、節約と資本蓄積とに對する刺激を提供するが故に、一國にとつて極めて有利なものであるとはいへ、併し輸入せられた貨物の種類が勞働賃銀の其に費さるものたるにあ



らざる限り、毫も資本利潤を高める傾向を有するものではない。」リカードが外國貿易の結果社會生産物が増加するとしてゐるのは一應正しい。けれどもかゝる社會生産物がすべて所得に分解して終ふと考へる點で誤りを犯してゐるのである。資本家的商品生産の特色は、社會生産物の價值が單に所得にのみ分解されるのではなく、不變資本部分にも分解されることに存する。リカードは社會生産物の價值がすべて所得に分解するとの見地から、國際貿易は安價な食料の輸入、勞銀の引下を通じて以外利潤率に影響なしとしてゐるが、國際貿易は安價な原料の輸入を通じてもまた利潤率に影響するはずである。而も生産力のより進んだ國は、その製品を價值以上の價格を以て世界市場に販賣することができ、それによつて餘剩利潤を實現する。之に對し生産力のより劣つた國は安價なる原料食料の輸入を通じて、一應利潤率の増進を招來することが出来るかにみえるが、その價值を全部的に實現することは出来ず、價值以下の販賣を餘儀なくされる。かうして國際間に於ける價值法則のモディフケーションは、資本家的商品生産社會を假定した際に於ても、そのまゝ妥當する。尤も國際貿易による利潤率の上昇作用は、不變資本部分の比例の増大を通じて再び利潤率低下に導くのであり、國內に於ける資本家的商品生産の矛盾を世界市場に於て擴大したものに他ならない。リカードは資本家的商品生産を假定した際に於ても、國際貿易を物々交換とみなし、そこに於ける矛盾二重對抗性を看過した。これを批判の第三の指標とする。

## 二

(A) 第一の點 以上われわれはリカードの國際價值論を、三つの指標を中心として批判して來た。第一の指標に關する點では、リカードは國際間に於ける不等價交換の存在を無視し、從つて國際間に於ける價值の無償移轉

搾取の存在を否定し、自由貿易による社會生産物の増加のみを強調してゐる。これに對して國際的不等價交換關係を、最も明確に定式化したのはカール・マルクスである。これは一名價值法則のモディフィケーションの問題といはれるが、餘剩價值學說史第三卷をみると次のやうに書かれてゐる。「リカードの理論を觀察してさへ、一國の三労働日が他國の一労働日と交換されう。價值法則は、この場合、本質的な變形を蒙る。いひかへれば、一國內において熟練労働複雑労働が、不熟練労働單純労働に對して有するのと同じやうな具合に、諸國の労働日は互に關係し合つてゐる。この場合に於ては、富國が貧國を搾取するのであつて、このことはジョン・スチュアート・ミルもまた彼の著『若干の未解決な問題云々』に於て述べてゐる如く、貧國がその交換によつて利得する場合においてさへも、さうである」(改造社版邦譯二八五頁) 一國を例にとつてみると複雑な労働と單純な労働との關係はかうなる。複雑な労働は單純な労働の強められたもの、或ひは倍加されたものであり、従つて少量の複雑な労働は多量の單純な労働に等しい。そして種類の相異つた各労働が尺度單位としての單純労働に換算される様様の比例は、社會的行程によつて行はれるのである。この單純労働はマルクスによつて或ひは抽象的人間労働と呼ばれ、社會的平均労働と呼ばれてゐる。ところでいまこの關係を國際間にあてはめてみると、より生産力の進んだポルトガルの八〇労働時間・九〇労働時間は複雑労働として現はれ、生産力の劣つた英國の一二〇労働時間・一〇〇労働時間は單純労働として現はれる。従つてその場合ポルトガルの八〇労働時間とイギリスの一二〇労働時間が等價におかれ、またポルトガルの九〇時間とイギリスの一〇〇時間とが等價におかれても、それは價值法則の貫徹であつて變形ではない筈である。然るにも拘らず何故マルクスは國際間に於て價值法則のモディフィケーションを云々したのであらうか。それはこのやうに説明さるべきである。一般に價值法則は平坦なる世界

を豫想し世界的規模に於ける自由競争の結果、複雑労働と單純労働の換算が行はれ、そこに世界的平均労働が成立することを前提してゐる。ところが現實に於ては單純労働への換算は自由競争の比較的完全に行はれる國內で先づ實現する。これをマルクスは國民的平均労働と名づけてゐる。各々の國民的平均労働は、世界市場に於ては國內に於ける複雑労働と單純労働のやうな具合に相互に關係しあひ、世界的平均労働の成立を豫想する。だから價值法則が實現するにしても、それは世界を平坦な社會と假定した場合のやうに直線的のものではなくて、階梯的なものである。而も世界市場に於ては國內市場に於けるやうに完全な自由競争は行はれがたい。こゝで一國內部に於ては勞資が自由に移動し、生産條件の均等化が行はれるに對し、國際間に於ては勞資は自由に移動せず、生産條件の均等化は行はれないといふカードの前提を想起すべきである。この前提はマルクスも大體そのまゝ認めてかゝつてゐるとみて差支ないやうである。少くとも國內に於ける自由競争が世界市場に於ける自由競争よりもより完全であり、従つて社會的平均労働は先づ國內に於て實現し、次に各國民的平均労働が相互に關係し合つて、世界的平均労働の形成に向ふといふ風に考へてゐたことは事實である。この事についてマルクスは労働賃銀の國民差を論ずる章で次のやうに書いてゐる。「各國には一定の中位的な労働能率があつて、商品の生産に支出される労働の能率がこの水準以下であるときは、該商品は社會的に必要な時間以上を要し、隨つて標準的品質の労働としては計算に入らぬことになる。與へられた一國についていへば、國民的平均以上に出づる能率程度のみが單なる労働時間の大小を以てする價值秤量の上に影響を及ぼすのである。個々の國々を組成分子とする世界市場に在つては、さうでない。労働の中位能率は國によつて相異なるもので、或る國では大きく或る國では小さい。要するに、國民的の各平均は、普遍的労働の平均單位を尺度單位とする所の一階梯を形成するのであつて

能率のより大なる國民的勞働は、能率のより小なる國民的勞働に比し、同一時間により多くの價值より多くの貨幣を以て言ひ現はされるものを生産することになるのである。」（改造社版邦譯資本論第一卷五四五頁）この引用文中にある「國民的の各平均は、普遍的勞働の平均單位を尺度單位とする所の一階梯を形成す」とある言葉が重要である。國內市場と同じ意味に於て世界的平均といふものは成立してゐないことが暗々表に認められ、生産力の國民的差異はかなり恒久的なものとして豫定されてゐる。商品流通及び貨幣流通の頻繁化によつて世界市場價格が成立し、世界的平均勞働の形成を豫想せしめてゐるが、それは完全でない。「一階梯」とはそのやうに理解すべきであらう。かくして國民的の平均勞働を尺度單位とする國內價值と世界價格との間に背離が生れて來る。續いてマルクスは書いてゐる。「尙また價值法則なるものは、その國際的應用上、次の事實によつて影響を受けることさらに甚しいのである。即ち、生産力のより大なる國民がその商品販賣價格を價值の水準まで低下することを競争上餘儀なくされることがないとするれば、生産力のより大なる國民的勞働は、世界市場に於ては能率のより大なる國民的勞働としても計算に入るといふ事實が、それである。」（同五四六頁）こゝで明らかにマルクスは世界市場に於て競争のため餘儀なくされない限り、國內價值からの世界價格の背離する可能性を認めてゐる。更らにこの點を確認するために、續いて書かれたいま一つの章句を引用しよう。「資本制生産が一國に發達すればする程、その國の勞働の平均的な能率及び生産力は、それと同じ比例で國際的の水準以上に高められることになるのである。されば相異つた國々で同一の勞働時間に生産される種々の異つた量の同種商品は、それぞれ不等的の國際價值を有することになり、而して此等の價值は相異つた價格（換言すれば、國際的の價值に準じて相異なる所の貨幣額）を以て言ひ現はされるのである。」（同上五四六頁）見らるるやうに、國內價值からの國際價值（より正確には國際價格）の

脊離が明らかに指摘されてゐる。

かうしてわれわれは國際間に於ける生産力の不均等からるところの國際的不等價交換の可能性を知ることが出來た。しかしそのみでは充分でない。この可能性は必然性にまで轉化されなければならない。例へばさきのリカードの設例に於て、ポルトガルは何れの部門に於ても、英國に比して生産力の優越をもつのであるけれどもその優越の程度がすべての部門に於て同等であるなら、兩國間に國際貿易は行はれない。一國內に於ける生産力發達の不均衡は、勞資の移動が自由とされる限りに於て一應價値に關係しないけれども、世界市場に於ては、國際間に於ける不均衡のみでなく、國內に於ける不均衡が價値に關係して來るのである。リカードがその國際價値論の前提で、生産力の絶對的不均等のみならず、相對的不均等を擧げたのはその意味に於てである。いまもし、さうではなくて、國內に於ける生産部門の生産力の發達が均等であり、生産力のより高い國の勞働時間が、すべて同じ比例で高い價格を以て表現され、生産力の低い國の勞働時間が同じ比例で低い價格を以て表現されるなら兩國の間に國際貿易は行はれない。いまリカードの設例を次のやうに變化してみよう。

葡萄酒		ラシヤ	
ポルトガル	80	ポルトガル	90
英 國	120	英 國	135

この場合葡萄酒の國際價格が八〇に決定され、葡萄酒生産に於ける勞働の換算比率が國際的に支配したとするなら、英國に於けるラシヤの價格は  $135 \times \frac{80}{120} = 90$  となり、ポルトガルと同一の國際價格をもつことになる。葡萄酒もラシヤも兩國に於て共に同一の價格をもち、輸出入せられない。そこで國際貿易が行はれるためには、生産

力の絶對的差等のみならず、その相對的差等が必要であるといふリカードの條件が問題となつて來るのである。事實上生産諸力の國際的水準以上の國に於ても、その生産力の優越はすべての部門に於て同一であることはない。例へばある國が工業化する場合、その國の農業生産力の優越は必ずしも工業生産力の優越に伴はず、むしろ農業の輸入に轉化する場合が多い。また同じ工業國の場合でも生産手段生産部門の優越性が高くなつて來ると、消費手段生産部門に於ては同一程度の優越を保つことができず、これを輸入に仰ぐに至ることはよくある例である。

再びリカードの例に歸らう。ポルトガルは葡萄酒生産に於て英國に對し $\frac{1}{2}$ 、即ち $\frac{1}{2}$ だけの生産力の優越をもつてゐる。いま兩國に商品交換が開かれた結果、かゝる基準が支配するに至るとすれば、ラシヤ生産に於ける英國の一〇〇労働時間は $100 \times \frac{1}{2} = 50$ ……しか實現しないことになる。即國際市場に於てそれだけの價格をもつことになるのである。従つてこゝではラシヤは英國からポルトガルに輸出される態勢にある。しかしポルトガルは葡萄酒をその價值通りに賣れば何らの餘剩利潤もないのであるから、競争によつて壓迫をうけない限り、必ず八〇以上の價格を以て販賣するにちがひない。従つて英國の一〇〇労働時間は必ず六・六以上には實現する。要するに葡萄酒に於けるポルトガルの優越は $\frac{3}{2}$ であり、ラシヤに於ける優越は $\frac{10}{9}$ なのであるから、その間の比率で兩國の國民的労働の換算が行はれば、葡萄酒はポルトガルからラシヤは英國から輸出さるべき態勢が出來上り、兩國間に於ける葡萄酒とラシヤの交換比率が決定される。そしてその場合兩商品とも價值通りに販賣されず、國家といふものの存在するため、價值法則のモディフィケーションが行はれてゐることになる。即ち生産力發展の相對的に異つたポルトガルと英國の國民的平均労働は八〇對一二〇を以ても、九〇對一〇〇を以て

も換算されて居らないのである。

(B) 第二の點 以上に於ける問題は貨幣を導入しても容易に論證することが出来る。リカードと同様に金が貨幣商品であるとしよう。然るとき金の機能は、商品の交換に於て價值表章の材料を供給すること、換言すれば各商品の價值を同分母の大いさとして、質的に等しく量的に比較しうべき大いさとして表現することである。このやうな機能をもつて金は一般的價值尺度となり、貨幣となるのである。しかし貨幣が存在するが故に、商品の價值を通約しうるのではなく、反對に各商品が對象化された人間労働の產物であり、その限りに於て通約しうればこそ、特殊商品を價值尺度たる貨幣に轉化するのである。従つて抽象的人間労働の幾時間が商品に對象化されてゐるかは、貨幣の分量で表現されることになる。之を別の言葉でいへば、一商品の價值を金でいひ現したものが商品の貨幣形態であり價格である。

さてリカードの例に於て貨幣商品たる金がポルトガルに於ても英國に於ても生産されると假定する。ポルトガルに於ては生産條件がより優れ、生産力がより高いのであるから、同一の金量はより少い労働時間を代表し、英國に於てはより多い労働時間を代表することになる。換言すればポルトガルに於ける貨幣の相對的價值は低く、英國に於ける貨幣の相對的價值は高いことになる。その比率は金を生産するに必要な兩國の労働時間の比率によつて決定される。かくして貨幣商品金が流通の媒介物として選ばれるに至ると、兩國に於ける國民的平均労働の換算比率は、金生産に必要な労働時間の比率におきかへられ、個々の生産部門に於ける生産力の差等の如何に拘らず、この價格によつて交換されねばならず、こゝに價值法則のモディフィケーション、價格の價值よりの脊離が生ずる。

もし金が兩國に於て生産せられないときは、廻り道をしてこの過程が實現される。「金や銀を生産する國々に於ては、一定の労働時間が直接に金や銀の一定量に體化するし、一方金も銀も生産しない國では廻り路をして――自國商品を、即ち國民的平均労働の一定部分を、鑛山所有國の金や銀に體現された労働時間の一定量と、直接または間接に交換することによつて、同じ結果に立ち至る。」（改造社版經濟學批判四五頁）ポルトガルに於ては生産力がより高く、その國民的平均労働の一單位はその價值以上に實現するのであるから、生産力のより低く、その國民的平均労働の一單位が價值以下にしか實現しない國のそれより多くの金量をうけとることになる。兩國とも金生産國との交換を通じて、ポルトガルに於ては貨幣の相對的價值がより低く、英國に於ては貨幣の相對的價值がより高いといふ狀態が招來されるのである。

國際商品交換に於ける價值法則のモディフィケーションは、以上見て來たやうに、貨幣を捨象した場合、貨幣を導入した場合、同じやうに論證することができ、その本質は變らない。だがそれは國際商品交換が本來物々交換であるが故にさうなのではなく、反對に國際商品が商品交換であるが故に、そこに貨幣の必然性が招來されるといふ意味に於て同一なのである。リカードは國際貿易が貨幣のヴェイルを取去つたときも、その本質は變らぬといふことから、それはその本質に於て物々交換であるとしてゐるが、誤謬である。マルクスは資本論の商品流通を説明する章（資本論第二卷八二、八三頁改造社版）で、「要するに流通行程なるものは、直接の生産物交換とは異り使用價值の位置變化即ち所有者變化を以て終滅するものではない。蓋し貨幣は終局に於て一商品の轉形例から脱出したところで、その爲に消滅するものではなく、商品の去つた流通場所に、絶えず沈澱するからである」と書き、その註のなかで「これは自明の事實であるに拘らず經濟學者殊に自由貿易論者たちによつて大抵は看過され



てゐる」とことわつてゐる。物々交換の場合は自己の勞働生産物を手放して、他人の勞働生産物を手に入れるのであつてこれらの兩行爲の間には直接の一致が存するが、商品の流通はこの一致を相對立した販賣と購買に、W—GとG—Wに分裂せしめ、直接交換を時間的、場所的、人的に分離するのである。この分裂のうちにマルクスは恐慌の可能性を見出してゐる。「商品に内在してゐる使用價值と價值との對立、私的勞働が同時にまた直接社會的な勞働として表現されねばならぬといふ矛盾、物の人格化と人格の物化との對立——凡そこれらの内在的矛盾、對立は、商品轉形の對立によつてその發達したる運動形態を與へられる。隨つてこの運動形態は恐慌の可能性を單なる可能のみを包含することになる」(改造社版邦譯資本論第一卷八三頁)

リカードは國際貿易を物々交換と看做し、それによる社會生産物の増大が、國內に於ける矛盾を調和するものであるとの結論に達し、自らを調和的自由貿易論者としたのであるが、以上のやうに國際貿易を商品交換と看做するとき、それは國內交換に於ける矛盾を國際的規模に於て擴大再生産したことに他ならぬものとなる。

(C) 第三の點 單純商品生産を假定し、その假定に立脚してなされた以上の分析は、勿論資本家的商品生産の場合にも妥當するものでなければならぬ。第一第二にわけて考察された國際間に於ける價值法則のモディファイケーションが資本家的商品生産社會に於て如何に現はれるか、それが第三の問題である。この點に關しマルクスは何ら特別に言及してゐない。資本論第二卷社會的資本の再生産を論ずる個所で、マルクスは故意に外國貿易を捨象して考へてゐるのである。マルクスがその再生産論に於て國際貿易を捨象したのは、國際貿易が當面の問題を解明するに當つて何ら本質的差異を生ずるものでないといふことのためであり、再生産が順調に行はれるとすれば、國際貿易を導入しても順調であり、再生産に於ける不均衡が發生するときは、國際貿易を導入しても結局

不均衡を本質的に變更するものでないとの認識に基くものであつて、國際貿易が物々交換であるとか、資本主義は國際貿易なしに成立するといふやうな見地に立つものではないのである。われわれはマルクスが一應拾象して考へたところの問題をここに取上げるわけなのである。マルクスはその再生産論に於て何故外國貿易を拾象するかについて次のやうに書いてゐる。「總じて資本制生産なるものは、外國貿易なくしては存在しえない。然し一の與へられた規模に於て順當年再生産が行はれると假定するとき、我々はまた次の事實をも假定することになる。即、外國貿易なるものは、國內生産物に代ふるに使用價值（即ち現物形態）の異つた他の物品を以てするに過ぎず、而もこれがための價值比例の上には、隨つてまた生産機關及び消費資料なる二種の商品部類が相互に交換される價值比例の上には、何等の變化を與へるものでなく、同様にこの兩部類のおの／＼に屬する生産物の價值が分割されて成る不變資本と可變資本と餘剩價值の相互比例の上にも、何等影響する所がないのである。年々再生産される生産物價值の分析に外國貿易を持ち込むことは、徒らに、説明の錯雜を招くのみであつて、問題それ自體の上にも、また問題解決の上にも、何ら新しき要素を供給するものではない。かういふ理由で、我々は外國貿易から全く抽象するのである。」（改造社版邦譯資本論第二卷四二九—四三〇頁）。さきにマルクスはリカードをも含めた自由貿易論者が商品交換を物々交換＝使用價值の交換と看做すことの誤謬を非難してゐるに拘らず、こゝでは外國貿易を使用價值の交換であるとしてゐる。これは一見奇異に感じられる。しかしこの理論段階に於ける問題は、あくまで社會的資本の再生産といふ立場から取扱はれてゐるのであつて、そのことは個別資本による國際交換が商品交換であるとの認識を毫も妨げるものではないのである。マルクスは固定資本の代置に關し第一部門と第二部門との矛盾を指摘したのちかう書いてゐる。「外國貿易なるものは、それが生産諸要素を（價值の上から

も) 代置するといふだけに止まらぬ限りは、此等の矛盾をより廣大な面に推し移すにすぎず、此等の矛盾は外國貿易によつてより大きな活動範圍を與へられることになるのである。」(前掲四二八頁)

社會的再生産の問題は、社會生産物の價值が如何にして年々再生産せられるかを、一應兩部門の均衡を假定して考察したものであり、現實に於て商品生産であることのうちに端初的に含まれた矛盾が、兩部門の不均衡に導くとの認識を妨げるものでなく、むしろこれを豫定してゐるのである。兩部門を構成する個々の産業は均衡な發展を遂げず、一層發展した産業が世界市場を求めることになる。これは單純商品生産を假定した上で既にわかれの確認したところであるが、資本家的商品生産を假定したときも全く同様である。總じて資本主義の發展は、農業に比して工業を、第二部門に比して第一部門を不均衡に増大する傾向をもつが、より發展した部門に於ける各産業は、外國市場を求めることになる。而もこのことは個々の産業についてみれば、生産規模の擴大化、可變資本部分に比しての不變資本部分の増大、資本の有機的構成的高度化となつて現はれ、利潤率低下傾向に導くのである。そして外國貿易はかゝる利潤率低下傾向を阻止する作用をもつ。マルクスは利潤率低下傾向に反對的作用する諸原因を論じた個所で外國貿易について次のやうに書いてゐる。「外國貿易は、それが一部分には不變資本諸要素を低廉ならしめ、一部分にはまた可變資本が轉化されゆく生活必需品を低廉ならしめる限りに於て、餘剩價值の率を高め、不變資本の價值を低下し、以つて利潤率を増進せしめるやうに作用する。外國貿易が總じてこの意味に作用するのは、それが生産規模の擴大を許すことに依るのである。これに依つて、外國貿易は一方に蓄積の進行を速かならしめると同時に、他方にまた、不變資本に比して可變資本を小ならしめ、以つて利潤率の低下を喚び起す。同様に外國貿易の擴大は、資本制生産の幼少期に於ては、これが基礎となるものであるが、

資本制生産方法が發達するに従ひ、その内部的必然に依つて、不斷に擴大されつゝある市場を求めるところの欲望に依つて、資本制生産をそれ自身の產物となつて來る。茲にもまた、さきに述べたところと同一の、作用上の二重對抗性が示される。リカードは外國貿易のこの方面を全く看過してゐた。」「(改造社版資本論第三卷二〇二頁)リカードが外國貿易は利潤率を引上げる作用を有しないとしたのに對し、マルクスは明らかに外國貿易が利潤率を上昇せしめ、資本蓄積を刺激する作用を有することを認めてゐる。それはリカードが外國貿易を物々交換としたのに對し、マルクスはこれを商品交換とみたことよりの當然の歸結である。

以上は商品が價值通りに販賣されるとみた場合であるが、生産力發達段階の優れた國々との間に行はれる外國貿易は、更らに餘剰利潤を許容することは、價值法則のモディフィケーションの問題について既にわれわれの知る通りである。マルクスは第三卷の利潤率低下傾向に反對的に作用する諸原因を論じた個所で更らにこの點を確認して次のやうに書いてゐる。「外國貿易に投ぜられた諸資本は次の理由によつてより高き利潤率を齎らしうる。第一に外國貿易に於いては、生産上の便宜の少ない他の諸國で生産された諸商品との間に競争が行はれて、進歩した方の國は競争國よりもその商品を安く賣り乍ら、而も價值以上に販賣するといふことになる。進歩した方の國の勞働はこの場合、比重のより高い勞働として利用されるわけであるが、その限りに於て利潤率は増進する」(前掲二〇二頁)。要するに資本家的商品生産社會の場合でも、單純商品生産社會を假定した場合と同様、外國貿易に於ける價值の無償移轉および作用に於ける矛盾——二重對抗性をマルクスが認めてゐることは、以上に於て明らかにされたところである。

### 三

單純再生産を假定して展開されたリカードの國際價值論は、「比較生産費説」なる名稱の下に、自由貿易を基礎づけるものとして、その後の資本家的經濟學によつてうけつがれて行つた。資本家的經濟學が古典學派から近代經濟理論に移行したとき、古典學派自由貿易論に附着した「厚生の」政策理念が排除され、比較生産費説は資本主義下に於ける外國貿易の理法を明らかにするだけのものとして、自らを純粹經濟學的貿易論と主張したけれども、その主張の背後には労働者の犠牲に於て自らの利益を追求する國際金融資本の純粹でない立場をそのまゝ認めやうとする新自由貿易の理念がおかれてゐた。そのやうなのみで近代經濟理論の取扱ふ國際價值論は比較生産費説は、古典派國際價值論の基礎におかれた労働價值説を「排除」し主觀價值説を以ておきかへなければならなかつた。（松井清著「貿易理論の研究」第三版昭和十六年參照）國際價值論の歴史は、自らを「純粹」化することによつて國際經濟關係に含まれた矛盾——二重對抗性を隠蔽するといふ役割を果したのである。

もつとも近代經濟理論自身が労働價值説を排除する仕方は、かくの如く「政策的」なものではなくして、あくまで論理的である。しかし乍らわれわれはその論理的批判のうちに含まれた「政策性」を明らかにしめることによつて、その論理的性格をもはつきりつかむことが可能であると考へる。いま國際貿易論の著者ゴットフリード・ハーバラーを取上げやう。かれは第十三章一般均衡論の一部としての國際貿易理論の第一節を労働價值説の排除と題し次のやうに書いてゐる。「労働價值説は、吾々が普遍的生産手段即ち労働を假定する場合に妥當する一般理論の特殊例と看做され得る。」（有斐閣版邦譯二八九頁）從つてハーバラーによればこの假定は現實には適

用されない。何故なら現實には労働のほか非常に多くの生産手段（土地、資本）生産された生産手段）が存在し、而も各々の生産手段は極めて特殊的であるからである。近代經濟理論はかうして労働價值説を極めて單俗的に理解し、労働を簡單に具體的労働と看做し、具體的労働から抽象的労働、熟練労働から不熟練労働への換算を否定する。國際價值論における労働價值説の役割は、ハーバラーによると、兩國内における二商品の相對價值を決定するだけのものであるから、より有効に相對價格を決定する理論操作さへあれば、労働價值説はこれを容易に拋棄することが出来るとし、オーストリア學派の代替費用論を以てこれに代へるのである。そしてその場合商品の費用は、A商品の最終單位を生産するために斷念されねばならぬB商品の量であり、費用＝喪失效用と理解せられる。古典學派の労働價值説から近代經濟理論の主觀價值説への移行が、一般に何を意味するかは問はないにしても、少くとも當面の問題である國際價值論に於て、このことはリカードの前提にあつた生産力發展の國際的差等といふことを全く抹殺して終つてゐる。八〇：九〇、一二〇：一〇〇といふ價值比率が  $1\frac{1}{2} : 1$  に解消せしめられるとき、最早われわれは二國間に於ける生産力の差等を比較すべき何らの基準も有しないことになつて終ふ。國民的平均労働の持續時間を以て示される生産力の差等は抹殺され、國際間に於ける搾取の存在、價值の無償移轉の問題は全く否定されて終つてゐる。尤もリカードの労働價值説自身のうちに既に在る俗流化への傾斜が存することは否定できないが、いまわれわれが問題にしようとしてゐるのは、この俗流化の傾向が近代經濟理論に於て定式化せられた點なのである。リカードの労働價值説に於て原理への矛盾だつた俗流化が、近代理論に於て原理化されてゐる點なのである。それは物々交換則商品交換といふリカードのドグマが、そのまゝ近代理論に繼承されてゐる點についてもあてはまる。近代經濟理論に於て、商品の價格は生産手段の價格の總計

に等しく、而も生産手段の價格はその限界生産力によつて決定される。生産物の價格はすべて所得に分解され、販賣は購買に等しく、その間何らの矛盾も生じない。Wicksell に於て。即ち不變資本部分が全く看過されてゐるわけである。だから外國貿易による社會生産物の増加は、そのまゝ所得の増加を意味し、そのことが生産規模の擴大化を通じて、一方の極に於ける資本の蓄積と他方の極に於ける窮乏の蓄積によつて、資本主義の矛盾を擴大再生産するものであることは完全に無視されてゐる。リカードに於て原理への矛盾として存在したドグマが、主觀價值説に於て原理化されてゐるといふことが出来るであらう。

このやうに見て来るなら主觀價值説を基礎に置いた近代經濟理論の調和思想は、結局古典學派の調和思想を再生産したものに他ならぬことが明らかになる。ではこの調和の思想はなぜ古典學派では勞働價值説に、近代經濟理論に於ては主觀價值説に結びついたものであらうか。近代理論に於てなぜリカードの勞働價值説が排除せられねばならなかつたのであらうか。このことは同じく資本家的調和の思想でありながら、前者の調和思想が産業資本家のそれであり、後者の調和思想が金融資本家のそれであるといふ解釋によつて明らかにされると思はれる。産業資本主義の段階に於ては先進國英國の工業と後進諸國の農業との間には、一應利害關係の調和が存在した。また安價な穀物の輸入といふ點に於て英國内に於ける資本と勞働との間にも一應利益の一致點を見出すことが出来た。即調和思想は一應現實的地盤を持つたのである。リカードの調和思想が勞働價值説といふ科學的方法と結びつきた基礎はこゝにある。けれどもかゝる利益の一致、調和はあくまで一應の利益の一致、一應の調和であることはいふまでもない。本來の矛盾はやがて表面化し、帝國主義段階に於ける國際的對立と一國內に於ける勞資の對立は、かゝる對立を剔抉する勞働價值説をむしろ有害とし排除することが必要となる。新なる調和思想が主觀價值説に結びついた根據はかくして理解されるであらう。